

ハイデルベルク・ストラスブール派遣報告書

文学部二十世紀学専修 濱 希望

本プログラムでは「戦争と平和」というテーマに則し自分たちで設定した課題についてプレゼンテーションを作成し、ドイツのハイデルベルク大学・フランスのストラスブール大学の学生とワークショップを行うことが主な目的となっていました。もちろん、歴史あるハイデルベルクやストラスブールの街を見学することをとても楽しみにもしていました。ワークショップはそれぞれの街に着いて2日目に行われましたが、1日目の見学では常に発表のことが頭の隅にありました。私は2つのワークショップのうちハイデルベルク大学で行われたものについて述べたいと思います。

ストラスブール大学での発表は交流する学生たちが日本語学科の方だったので日本語で行われましたが、ハイデルベルク大学での発表は英語で行われました。発表のために2人組を組んだ私たちは「戦争と平和」についての資料を集め、読むことについてはもう少し前から行っていました。実際にプレゼンテーションを作成し始めたのは渡航の約1週間前でした。「戦争と平和」という広義で深刻なテーマについて、しかも英語で発表するということが私たちはとても緊張していました。テストやレポートの合間に2人で連絡を取り合い、なんとかプレゼンテーションを作り上げカム先生に添削していただきました。ハイデルベルクに着いてからも前日のホテルで台本を読みあわせて時間を計ったり慌ただしく当日を迎えました。

ハイデルベルクは大学を中心として栄えた大学街で街の至る所に大学の建物があります。ホテルから歩いて10分ほどの建物にある教室でワークショップは行われました。教室にはハイデルベルク大学の文化越境専攻の学生が20人ほどいて、先生はハイデルベルク大学の先生とカム先生の2人でした。発表は私たち京都大学生のものと文化越境専攻の学生のものとの交互に行われました。発表のテーマには「朝鮮軍事境界線での映画祭」「東アジア共同体の可能性」「渡辺一夫、ポール・ヴァレリー、トマス・マン」「東アジア共通教科書作成の可能性」「絵葉書に描かれた満州民族の表象」「日本海軍の伝統」「カンボジアのポル・ポト政権」などがありました。私たちの発表それ自体はそれぞれ台本を考えて練習してきていたので上手くいったと思います。しかし、ハイデルベルク大学の学生たちは発表のあとの質問や自分がその発表をみてどう思ったのかを大事にし発言していました。そのため発表のあとのディスカッションが盛んで私たち日本人学生は多少萎縮してしまったようなところがありました。

今回のワークショップでは自分の英語力と発言する度胸の必要性を感じました。ハイデルベルク大学生の発表で使われた英語は速く、発表について聞き取れない箇所が何箇所もあり、またディスカッションについても同じ理由でついて行けていないと感ずることがありました。自分が今まで聞き取れていた英語は相手が合わせてくれていた英語なのだなということを実感し、留学生はこのような厳しい環境で学習しているのだなと思いました。また自分の思うことがあっても英語力に対する気後れだったり内容に対する不安があり発言できないといったことがありました。後で考えてみてこのような場で必要なのはとりあえず恐れずに自分の意見を言うことだと気付きました。

外国の大学でのワークショップの経験、初めてのヨーロッパの街並みの見学など自分にとって新しいこと刺激的なことがたくさんあったプログラムでした。私たちにこのような機会を与えてくださったみなさんに感謝申し上げます。